

大阪市立  
自然科学  
博物館  
蔵書之印

VOL.2

No.1

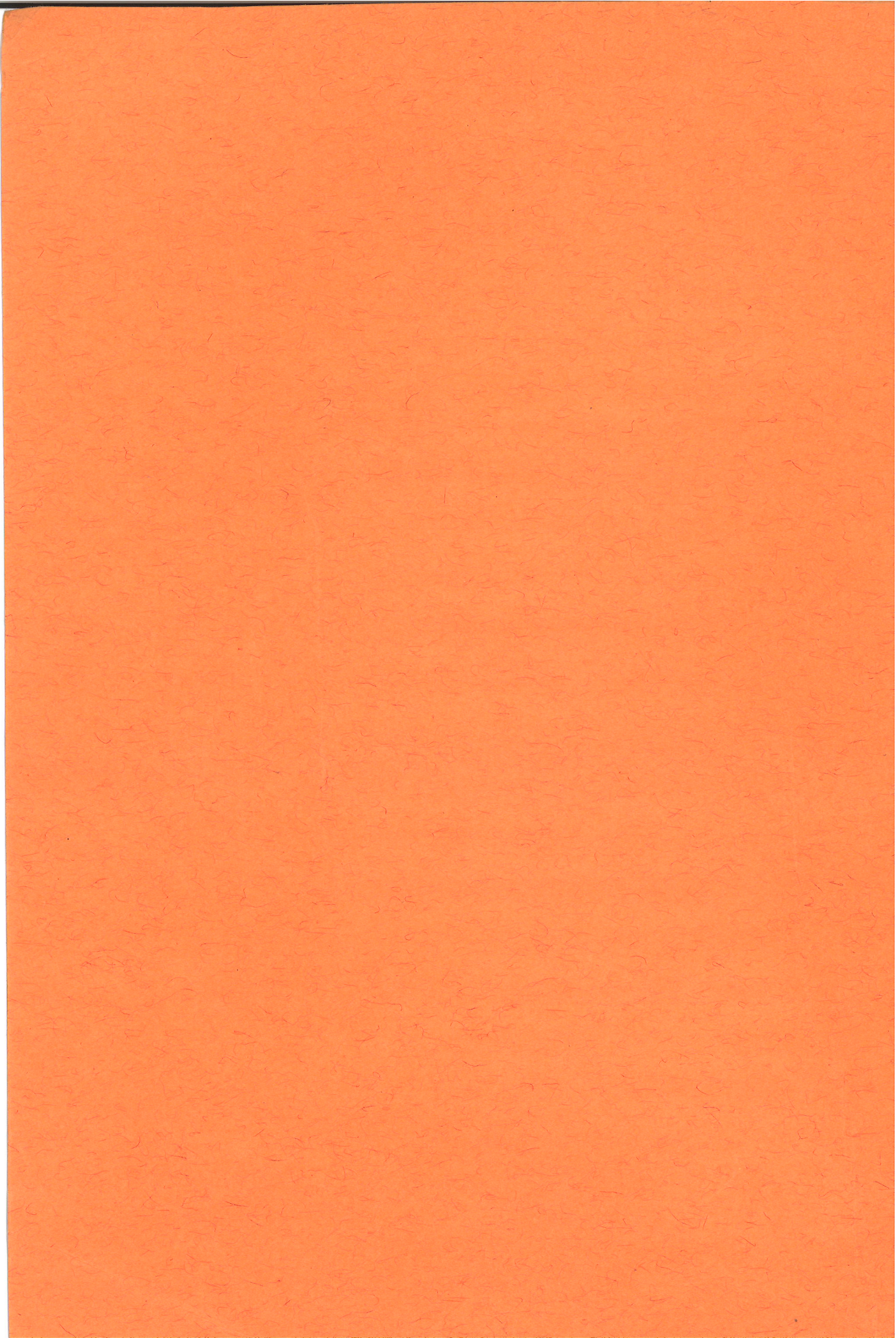
March.1971

BEETLES

びいとるず

大阪甲虫同好会







## 目 次

### ○ 灯火に飛来した岩湧山の甲虫類について - 3 -

#### V. 調査資料の報告と解説

(17) タمامシ科	・ (18) コメツキムシ科	2
(19) ヒゲブトコメツキ科	・ (20) コメツキダマシ科	4
(21) ホタルモドキ科	・ (22) ジョウカイボン科	5
(22) ベニボタル科		6
(24) カツオブシムシ科	・ (25) シバナムシ科	8
(26) ヒラタキクイムシ科	・ (27) コクヌスト科	8
(28) カツコウムシ科		9
(29) ケシキスイムシ科		10
(30) ネスイムシ科	・ (31) ヒラタムシ科	12
(32) ホソヒラタムシ科		13
(33) キスイムシ科		15
(34) コメツキモドキ科	・ (35) オオキノコムシ科	18
(36) ヒメハナムシ科	・ (37) ミジンムシ科	18
○ 文 献 の 抄 録	( 芝田太一 )	21
○ 若干のハネカクシ科甲虫の採集観察メモ	( 伊藤建夫 )	23
○ クリシギゾウムシの生態	( 木村 裕 )	24
○ 連 絡		26
○ 編 集 後 記		27



灯火に飛来した岩湧山の甲虫類について - 3 -

V 調査資料の報告と解説

(17) タマムシ科 Buprestidae

種の同定は黒沢良彦氏にお願いした。

1. *Agrius viridiobscurus* E. SAUNDERS アオグロナガタマムシ

この種は6月25日午後8時に一頭飛来した。

(18) コメツキムシ科 Elateridae

種の同定は大平仁夫氏にお願いした。

1. *Agrypnus (Agrypnus) binodulus binodulus* MOTSCHULSKY, サビキコ  
リ
2. *Pectocera fortunei fortunei* CANDÈZE ヒゲコメツキ
3. *Quasimus (Quasimus) ovalis* CANDÈZE, マルマメコメツキ
4. *Cardiophorus niponicus* LEWIS, ホソハナコメツキ
5. *Dicronychus (platynychus) adjutor* CANDÈZE, アカアシハナコメツキ
6. *Pseude[ater] carbunculus* LEWIS, ヒメクロコメツキ
7. *Melanotus (Melanotus) legatus* CANDÈZE, クシコメツキ
8. *Melanotus (Melanotus) lewisi* SCHENKLING, ルイスクシコメツキ
9. *Pseudathous secessus secessus* CANDÈZE, クロツヤハダコメツキ
10. *Stenagostus umbratilis* LEWIS, オオツヤハダコメツキ
11. *Elater sieboldi* CANDÈZE, オオナガコメツキ
12. *Neotrichophorus junior* CANDÈZE, ヒゲナガコメツキ
13. *Dolerosomus gracilis* CANDÈZE, キバネホソコメツキ
14. *Glyphonyx bicolor* CANDÈZE, キバネクチボソコメツキ
15. *Silesis musculus* CANDÈZE, クチブトコメツキ

上記の中で、マルマメコメツキ、キバネホソコメツキ、キバネクチボソコメツキ、クチブトコメツキの灯火に飛来する記録は、今までないようである。



## (17) タمامシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	アオグロナガタمامシ							1						1

## (18) コメツキムシ科

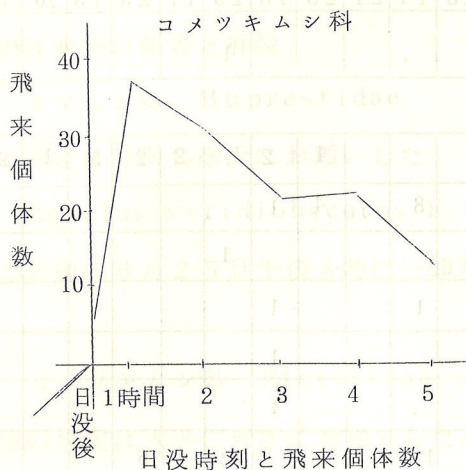
1	サビキコリ					1	2		2	2	5	1	9	22
2	ヒゲコメツキ			8		4	1							13
3	マルマメコメツキ							1						1
4	ホソハナコメツキ			1			1							2
5	アカアシハナコメツキ						1							1
6	ヒメクロコメツキ						1							1
7	クシコメツキ			14	1	14	12	2	4	6				53
8	ルイスクシコメツキ							8				1		9
9	クロツヤハダコメツキ								1					1
10	オオツヤハダコメツキ								2	1		1		4
11	オオナガコメツキ									1				1
12	ヒゲナガコメツキ						2		1					3
13	キバネホソコメツキ			2			1							3
14	キバネニセクチブトコメツキ								2	7				9
15	クチブトコメツキ								1	2	1			4

## コメツキムシ科 飛来個体数(種類数)の季節的变化と時間帯

月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	0	8	1	0	3	0	2	0	0	0	1	15
8	0	0	7	0	3	10	6	1	9	1	0	3	40
9	0	0	1	0	7	5	0	4	3	3	1	4	28
10	—	0	2	0	2	3	1	2	2	1	1	1	15
11	—	0	7	—	7	0	4	4	5	1	1	0	29
計	0	0	25 (4)	1 (1)	19 (3)	21 (8)	11 (3)	13 (7)	19 (6)	6 (2)	3 (3)	9 (1)	127 (15)



(考 察)



コメツキムシ科の飛来時期は5月中旬に始まり、一部をのぞき8月下旬に終る。個々の種についてみると、クシコメツキ (5月中旬～7月下旬)、サビキコメツキ (5月下旬以後)の2種は長期にわたって飛来しているが、他は梅雨期の前後で2時間のグループに大別出来る。梅雨前にみられる種はヒゲコメツキ・ホソハナコメツキ・キバネホソコメツキなど、梅雨後はルイスクシコメツキ・オオツヤハナコメツキ・キバネニセクチプトコメツキ

クチプトコメツキなどである。

次に飛来時刻をみると、日没後1時間に最も飛来数が多く、それ以後は徐々に減少するが、他の甲虫 (例えばガムシ科・ハネカクシ科・ユガネムシ科) でみられるように急減しない点が目立つ。

又コメツキムシ科では飛来状況などから考え、気象条件がそれほど飛来阻止の要因となっていない点も他の甲虫類とは相違している。 (野村)

#### (19) ヒゲプトコメツキ科 Throscidae

種の同定と解説は久松定成氏にお願いした。

##### 1. *Aulonothroscus longulus* (WEISE), ヒゲプトコメツキ

本種は原色大図鑑 (北隆館) では *Throscus* 属となっているが、*Aulonothroscus* 属であり、*A. schenklingi*, *A. micado* は *Trixagus* 属である。ヒゲプトコメツキ科は5月中旬から6月下旬に飛来し、飛来時刻はコメツキ科に類似する。

#### (20) コメツキダマシ科 Eucnemidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。



1. *Dirrhagus olexai* HISAMATSU
2. *Farsus ainu* FLEUTIAUX, アイヌコメツキダマシ

コメツキダマシ科は6月下旬から8月下旬にみられ、飛来時刻は決っていない。

(19) ヒゲブトコメツキ科

	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1 ヒゲブトコメツキ			7		5	5	2						19

(20) コメツキダマシ科

1 <i>Dirrhagus olexai</i>							1			1			2
2 アイヌコメツキダマシ								1	4	1	1		7

(21) ホタルモドキ科 Drilidae

種の同定は木村裕による。

1. *Drilonius osawai* Nakane, ムネアカホソホタルモドキ

本種は7月23日午後8時に一頭飛来した。

(22) ジョウカイボン科

種の同定及び解説は木村裕による。

1. *Podabrus heydeni* KIESENWETTER, クビボソジョウカイ
2. *Podabrus lictorius* LEWIS, ミヤマクビボソジョウカイ
3. *Podabrus macilentus* KIESENWETTER, ヒメクビボソジョウカイ
4. *Podabrus malthinoides* KIESENWETTER, クロヒメクビボソジョウカイ

上記4種は岩湧山を含む低山地において4月下旬から5月下旬に普通に採集される。高山地では7~8月に採集される。

5. *Podabrinus obscuricolor* Pic, クロヒゲナガジョウカイ
6. *Themus cyanipennis* MOTSCHULSKY, アオジョウカイ
7. *Athemus suturellus* MOTSCHULSKY, ジョウカイボン



8. *Athemus vitellinus* KIESENWETTER, セボシジヨウカイ
9. *Prothemus ciusianus* KIESENWETTER, マルムネジヨウカイ
10. *Cantharis adusticollis* KIESENWETTER, ムネアカクロジヨウカイ
11. *Rhagonycha japonica* KIESENWETTER, ヒメジヨウカイ

本種は春季に多発し、低山地では特に4月下旬～5月上旬に多い。

12. *Rhagonycha longipes* WITTMER

本種は春季のみ見られ、4月中～下旬に多い。

13. *Malthodes* sp.

(23) ベニボタル科 Lycidae

種の同定は木村裕による。

1. *Plateros coracinus* KIESENWETTER, クロハナボタル
2. *Lopheros* sp.

(21) ホタルモドキ科

	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1 ムネアカホソホタルモドキ									1				1

(22) ジヨウカイボン科

1 クビボソジヨウカイ			6		2								8
2 ミヤマクビボソジヨウカイ			2		1	5							8
3 ヒメクビボソジヨウカイ			3				1						4
4 クロヒメクビボソジヨウカイ		2	2		2	1	4						11
5 クロヒゲナガジヨウカイ						3							3
6 アオジヨウカイ					1	2							3
7 ジヨウカイボン			7	1	2	1							11
8 セボシジヨウカイ			3		3		1						7
9 マルムネジヨウカイ						1							1
10 ムネアカクロジヨウカイ			1					2					3
11 ヒメジヨウカイ		237	49	2	5								293
12 <i>R. longipes</i>			1										1
13 <i>Malthodes</i> sp.		1											1



(23) ベニボタル科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	クロハナボタル						1	2				1		4
2	Lopheros sp.							1						1

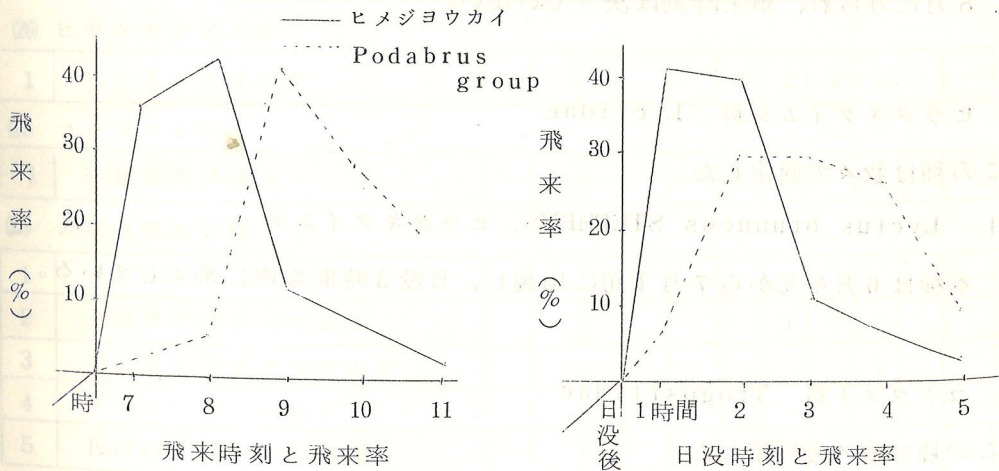
(考察)

ジョウカイボン科は13種の飛来がみられ、総個体数の80%以上はヒメジョウカイで占められる。そして岩湧山での出現期は4月下旬～7月中旬で、梅雨明けの夏には全くみられない。また種類数では5月中旬から6月中旬に最も多い。さらに飛来時刻をみると、ヒメジョウカイは日没後2時間以内にその80%以上が飛来するのに対して、Podabrusなど他の種ではそれより遅く、日没後2～4時間にみられる。

(木村・野村)

ジョウカイボン科 飛来個体数の季節的变化と時間帯

月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	100	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	107
8	0	104	26	2	3	0	0	0	0	0	0	0	135
9	0	19	24	1	5	6	3	2	0	0	0	0	60
10	—	14	11	—	5	6	2	0	0	0	0	0	38
11	—	3	7	—	3	0	1	0	0	0	0	0	14
計	0	240	74	3	16	13	6	2	0	0	0	0	354





(24) カツオブシムシ科 Dermestidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Trinodes rufescens* REITTER, チビケカツオブシムシ

本種は6月25日、日没直後に飛来した1頭だけである。

(25) シバンムシ科 Anobiidae

種の同定は久松定成氏、酒井雅博氏にお願いした。

1. *Ernobius* sp.
2. *Oligomerus brunneus* (OLIVIER), アカチャホソシバンムシ
3. *Stegobium paniceum* (LINNE), ジンサンシバンムシ
4. *Gastrallus inmarginatus* (MÜLLER), フルホンシバンムシ
5. *Trichodesma fasciculare* REITTER, トサカシバンムシ

本種は我々で同定したものだが、久松氏によると最近この種の研究に於いて類似種があり再検討を要するとのことであった。残念ながら当時の標本は保存していないが、色彩も鮮明な黄褐色を呈していた等我々の記憶にあわせ他のデータによる当岩湧山産のものがこの種であると同氏の許で同定されているので、一応誤りないものと思うとの御教示を頂いた。久松氏に謝意を呈して付言する次第である。

6. *Theca (Sculptothea) hilleri* SCHILSKY, チビケシバンムシ

シバンムシ科では4月に飛来した *Ernobius* sp. 以外の5種は6月下旬から8月にみられ、飛来時刻は決っていない。

(26) ヒラタキクイムシ科 Lyctidae

この種は我々で同定した。

1. *Lyctus brunneus* STEPHENS, ヒラタキクイムシ

本種は6月中旬から7月下旬に出現し、日没3時間以内に飛来している。

(27) ユクヌスト科 Trogoxetidae

この種は我々で同定した。



1. *Glynocharis japonica* REITTER, チビコクヌスト

本種は6月中旬から7月下旬にみられ、すべて日没直後に飛来している。

(28) カツコウムシ科 Cleridae

種の同定は(5)を宮武睦夫氏にお願いし、他の4種は我々で行った。

1. *Tillus igarashii* KONO, イガラシカツコウムシ
2. *Stigmatium nakanei* IGA, クロサビカツコウムシ
3. *Teneroides maculicollis* (LEWIS), キムネツツカツコウムシ
4. *Necrobia ruficollis* (FABRICIUS), アカクビホシカムシ
5. *Korynetinae* の一種

カツコウムシ科の出現期は6月下旬から7月下旬であり、飛来時刻は午後8時前後と11時前後にすべて飛来している。

(24) カツオブシムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	IX 20	IX 10	計
1	チビケカツオブシムシ						1							1

(25) シバンムシ科

1	<i>Ernobius</i> sp.		1											1
2	アカチャホソシバンムシ							2						2
3	ジンサンシバンムシ								4		1			5
4	フルホンシバンムシ						2							2
5	トサカシバンムシ						1							1
6	チビケシバンムシ						1			1				2

(26) ヒラタキクイムシ

1	ヒラタキクイムシ					3	2	3	1					9
---	----------	--	--	--	--	---	---	---	---	--	--	--	--	---

(27) コクヌスト科

1	チビコクヌスト					1	2		3					6
---	---------	--	--	--	--	---	---	--	---	--	--	--	--	---

(28) カツコウムシ科

1	イガラシカツコウムシ						1							1
2	クロサビカツコウムシ						1	1						2
3	キムネツツカツコウムシ								1					1
4	アカクビホシカムシ								3					3
5	<i>Korynetinae</i> の一種							2						2



(29) ケシクスイムシ科 Nitidulidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Haptoncus* *ocularis* (FAIRMAIRE), モンチビヒラタケシクスイ
2. *Eपुरaea* (*Micruria*) *japonica* (MOTSCHULSKY), ヨゲチャヒラタケシクスイ
3. *Eपुरaea* (*Micruria*) *commutata* GROUVELLE
4. *Eपुरaea* (s. str.) *paulula* REITTER, マメヒラタケシクスイ
5. *Eपुरaea* (s. str.) *kyushuensis* SJÖBERG, ウスモンアカヒラタケシクスイ
6. *Eपुरaea* (s. str.) *domina* REITTER, ヒメヒラタケシクスイ
7. *Eपुरaea* (s. str.) *parilis* REITTER, ホソキヒラタケシクスイ
8. *Eपुरaea* (s. str.) *obnoxia* REITTER

本種は比較的少ない種である。

9. *Eपुरaea* (s. str.) *pellax* REITTER
10. *Soronia* *japonica* REITTER, キマダラケシクスイ
11. *Soronia* *lewisi* REITTER, クロキマダラケシクスイ
12. *Cyllodes* *dorsalis* REITTER, ベニモンマルケシクスイ
13. *Lasiodactylus* *pictus* MACLEAY, アカマダラケシクスイ
14. *Librodor* *japonicus* MOTSCHULSKY, ヨツボシケシクスイ

ケシクスイムシ科の飛来種類数は6月中・下旬に最も多く、全飛来種類数14種のうち11種に及んでいる。これは春から初夏に出現するグループ(ホソキヒラタケシクスイなど6種)と初夏から盛夏に出現するグループ(マメヒラタケシクスイなど6種)の交代期にあたり、両グループが同時にみられるためである。

次に飛来時刻を調べると、マメヒラタケシクスイは日没3~4時間後に最も多くみられるが、他の種では日没1~2時間後にその大半が飛来している。

(野村)



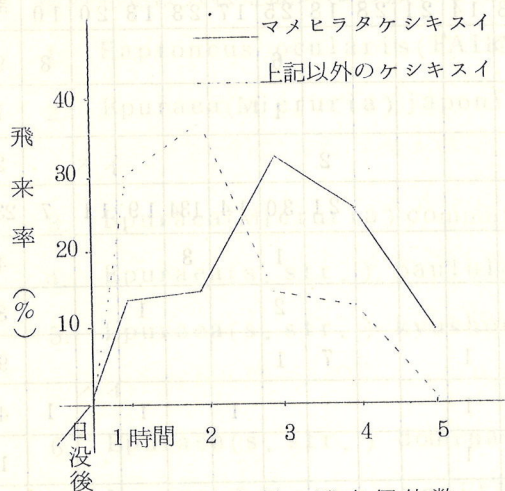
(29) ケシキスイムシ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VII 13	VIII 20	IX 10	計
1	モンチビヒラタケシキスイ							6					3	9
2	コゲチヤヒラタケシキスイ							1						1
3	<i>Epuraea commutata</i>						2							2
4	マメヒラタケシキスイ						21	30	14	134	19	11	7	236
5	ウスモンアカヒラタケシキスイ							1		3				4
6	ヒメヒラタケシキスイ							2			1			3
7	ホソキヒラタケシキスイ			1			7	1						9
8	<i>Epuraea obnoxia</i>			1					1		1		1	4
9	<i>Epuraea pallax</i>			1										1
10	キマダラケシキスイ						2							2
11	クロキマダラケシキスイ						2							2
12	ベニモンマルケシキスイ			1										1
13	アカマダラケシキスイ						2							2
14	ヨツボシケシキスイ							1			1			2

ケシキスイ科 飛来個体数の季節的変化と時間帯

月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	3	3	11
8	0	0	2	0	0	9	3	7	25	10	7	3	66
9	0	0	1	0	0	4	13	6	2	2	0	2	30
10	—	0	0	0	0	14	23	1	66	5	1	2	112
11	—	0	0	—	0	9	3	1	31	1	0	1	46
12	—	—	—	—	—	—	—	—	13	—	—	—	13
計	0	0	4	0	0	36	42	15	137	22	11	11	274





月日時	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	0	0	0	4	3	2	9
8	2	1	7	22	7	7	2	48
9	0	5	6	2	2	0	2	17
10	12	21	1	66	5	1	0	106
11	7	3	0	31	1	0	1	43
12	—	—	—	13	—	—	—	13
計	21	30	14	134	22	11	11	274

(30) ネスイムシ科 Rhizophagidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Monotoma picipes* HERBST, トビイロデオネスイ

本種は8月20日、日没直後に飛来した1頭だけである。

(31) ヒラタムシ科 Cucujidae

種の同定及び解説は久松定成氏にお願いした。

1. *Laemophloeus dorcoides* REITTER, オオキバチビヒラタムシ
2. *Laemophloeus laevior* REITTER
3. *Placonotus testaceus* (FABRICIUS), カクムネチビヒラタムシ

最近外国では *Laemophloeus* を細分化している。その分類法に従えば、1, 2 は共に真の *Laemophloeus* 属ではないが、本誌が謄写印刷であることを考慮して新しい処置をとることを避けた。

ヒラタムシ科は5月中旬に始まり、秋まで散発的に出現し、いずれも日没後2時間以内に飛来している。



(32) ホソヒラタムシ科 *Silvanidae*

種の同定及び解説は久松定成氏にお願いした。

1. *Psammoecus triguttatus* REITTER, ミツモンセマルヒラタムシ
2. *Silvanus affinis* REITTER, フタトゲホソヒラタムシ
3. *Silvanoprus anausticollis*(REITTER), ホソムネホソヒラタムシ
4. *Silvanoprus scuticollis* WALKER, ミツカドコナヒラタムシ
5. *Silvanoprus grouvellei* (REITTER), ホソミツカドコナヒラタムシ
6. *Silvanoprus inermis* (REITTER)

原色大図鑑(北隆館)の *Leucohimatium breve* (Cryptohagidae)は本種かもしれない。

(30) ネスイムシ科

	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1 トビイロデオネスイ											1		1

(31) ヒラタムシ科

1 オオキバチビヒラタムシ						2			1				3
2 <i>L. laevior</i>			2		1								3
3 カクムネチビヒラタムシ							1			3	1		5

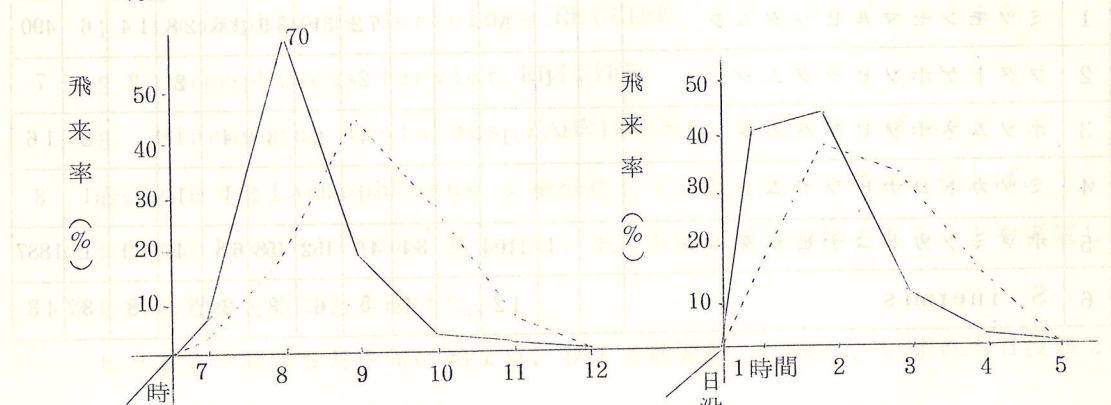
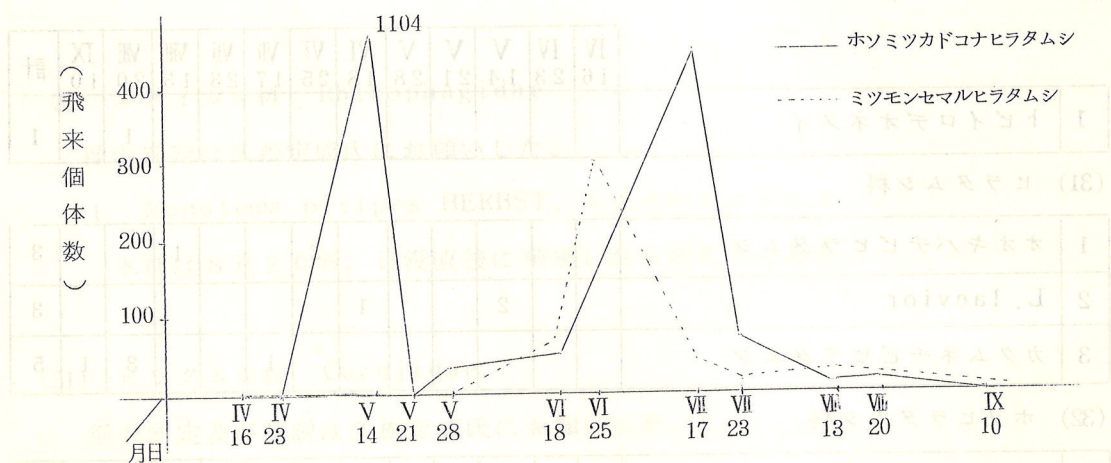
(32) ホソヒラタムシ科

1 ミツモンセマルヒラタムシ		5			72	310	39	16	28	14	6	490	
2 フタトゲホソヒラタムシ		1			2				2	2		7	
3 ホソムネホソヒラタムシ			1		4	2	3	4			2	16	
4 ミツカドコナヒラタムシ								1	1		1	3	
5 ホソミツカドコナヒラタムシ		1	1104		31	49	152	458	68	4	19	1	1887
6 <i>S. inermis</i>			12		4	5	6	3	2		8	3	43



月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VI 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	2	91	0	13	0	0	1	0	3	19	3	132
8	0	0	778	0	20	30	44	448	68	24	18	2	1482
9	0	0	213	0	1	45	268	32	6	4	5	2	576
10	—	0	17	0	1	42	130	18	6	4	1	3	222
11	—	0	23	—	0	15	28	4	8	0	0	3	81
12	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	3
計	0	2	1122	0	35	132	470	503	91	35	43	13	2446

ホソヒラタムシ科の出現期



飛来時刻と飛来率

日没時刻と飛来率



(考 察)

ホソヒラタムシ科の飛来は4月下旬に始まり、秋までみられ、6種2446個体である。その77%はホソミツカドコナヒラタムシ、20%はミツモンセマルヒラタムシであり、残りの4種は3%にすぎない。次に個々の種の出現期についてみると、ホソミツカドコナヒラタムシは5月中旬と7月中旬にピークがみられるので、年2回発生であろう。これに対してミツモンセマルヒラタムシでは6月下旬にピークがみられることにより、年1回の発生と考えられる。またミツカドコナヒラタムシ(7月下旬以後)以外は出現期が非常に長い、風が強い時は全く飛来しないので、気象条件(特に強風)が飛来阻止の要因となっている。さらに飛来時刻について調べると、ホソミツカドコナヒラタムシは日没後2時間以内に85%の飛来がみられるが、他の5種はいずれも60%未満である。(野村)

(33) キスイムシ科 Cryptophagidae

種の同定及び解説は久松定成氏にお願いした。

1. *Cryptophagus decoratus* REITTER, クロモンキスイ
2. *Cryptophagus lewisi* REITTER
3. *Cryptophagus japonicus* REITTER, ニホンヒゲブトキスイ

本種は非常に珍しい種である。

4. *Cryptophagus* sp.
5. *Atomaria lewisi* REITTER, キイロセマルキスイ
6. *Atomaria dilatata* REITTER

本種も極めて稀な種である。

7. *Atomaria horridula* REITTER
8. *Ephistemus japonicus* REITTER, マルガタキスイムシ

(考 察)

キスイムシ科の飛来は3属8種590個体である。その飛来状況を見ると、属によってかなり相違しているので、次の3グループに区分した。

I型——*Cryptophagus* 属、*C. lewisi* など4種で、4月下旬から6月中旬までみられるが、その90%以上は5月中旬に出現する。



Ⅱ型— Atomaria 属、A. lewisi など 3 種で、5 月中旬から秋までみられるが、

その 90% 以上は 6 月中・下旬に飛来する。

Ⅲ型— Ephistemus japonicus は 6 月中旬と出現期が最も遅く、6 月下旬

にピークがあるが、その後も上記の 2 属のように急減しないで秋までみられる。

以上の出現期によりキスイムシ科の各属の発生回数を推察すると、Cryptophagus 属と Atomaria 属は年 1 回、Ephistemus 属は年 1~2 回であろう。

次に 3 グループの飛来時刻をみると、Ⅰ型は日没直後から 1 時間以内に 70%、2 時間以内に 97% の飛来がみられる。Ⅱ型は 1 時間以内に 50%、2 時間以内に 85% の飛来がみられ、Ⅲ型では 1 時間以内に 20%、2 時間以内に 50%、3 時間以内に 80% の飛来がみられる。このように、出現期の早いグループは飛来時刻も早いことがわかる。さらに飛来時の気象条件(気温)との関係を見ると、Ⅰ型は 18~20°C、Ⅱ型及びⅢ型では 20~24°C の時にそのほとんどが飛来しているので、生理的なものも飛来に大きな影響を与えていると考えられる。(野村)

(33) キスイムシ科

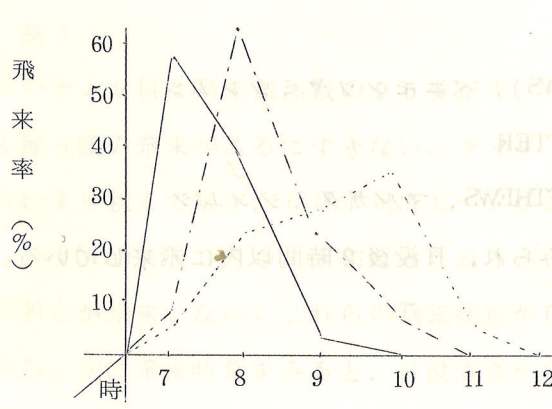
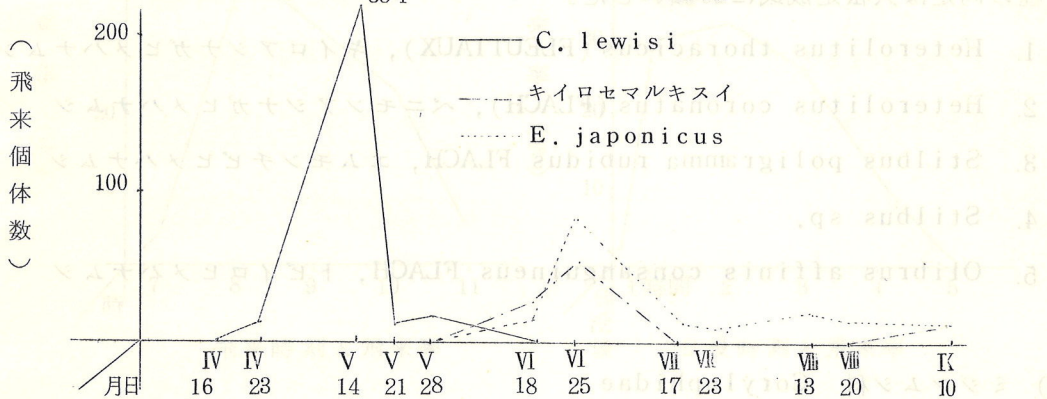
	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1 クロモンキスイ		3	17		1								21
2 C. lewisi		10	322	7	13	2							354
3 ニホンヒゲブトキスイ							1						1
4 Cryptophagus sp.		1											1
5 キイロセマルキスイ			1			22	51		1			4	79
6 A. dilatata			1				1						2
7 A. horridula						1							1
8 マルガタキスイムシ						7	80	9	4	17	10	4	131



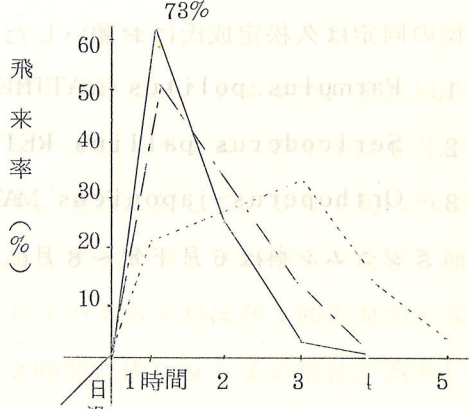
キシムシ科 飛来個体数の季節的変化と時間帯

月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
7	0	12	185	7	7	2	0	0	0	5	3	5	226
8	0	2	140	0	7	21	43	7	1	7	3	1	232
9	0	0	15	0	0	4	39	1	1	4	2	2	68
10	—	0	1	0	0	3	45	1	1	1	2	0	54
11	—	0	0	—	0	2	6	0	1	0	0	0	9
12	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1
計	0	14	341	7	14	32	133	9	5	17	10	8	590

354 キシムシ科の出現期



飛来時刻と飛来率



日没時刻と飛来率



(34) コメツキモドキ科 Languriidae

この種は我々で同定した。

1. *Languriomorpha lewisii* CROTCH, ルイスコメツキモドキ

この種は6月25日、日没直後に飛来した1頭だけである。

(35) オオキノコムシ科 Erotylidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Cryptophilus obliterated* REITTER, ヒラナガムクゲオオキノコ

この種は6月18日、日没直後に1頭飛来しただけである。

(36) ヒメハナムシ科 Phalacridae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

1. *Heterolitus thoracicus* (FLEUTIAUX), キイロアシナガヒメハナムシ
2. *Heterolitus coronatus* (FLACH), ベニモンアシナガヒメハナムシ
3. *Stilbus poligramma rubidus* FLACH, エムモンチビヒメハナムシ
4. *Stilbus* sp.
5. *Olibrus affinis consanguineus* FLACH, トビイロヒメハナムシ

(37) ミジンムシ科 Corylophidae

種の同定は久松定成氏にお願いした。

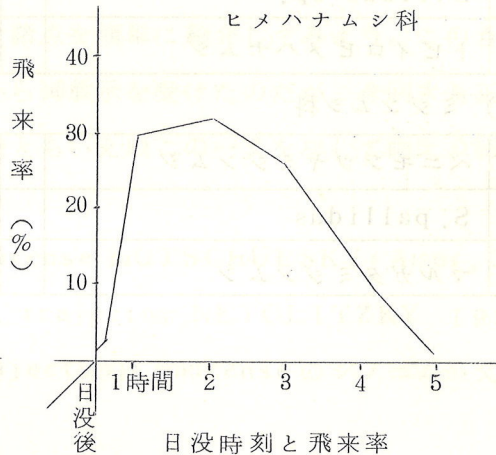
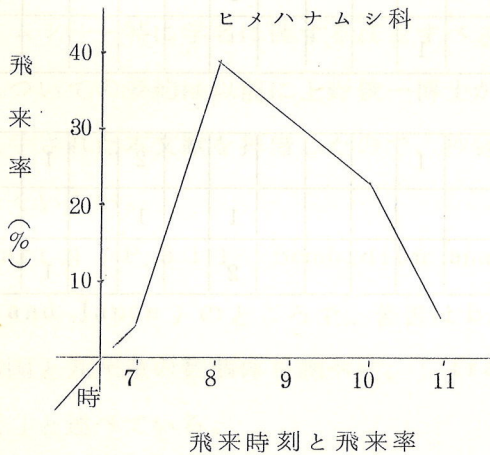
1. *Parmulus politus* (MATTHEWS), ベニモンツヤミジンムシ
2. *Sericoderus pallius* REITTER
3. *Orthoperus japonicus* MATTHEWS, マルガタミジンムシ

ミジンムシ科は6月下旬～8月にみられ、日没後2時間以内に飛来している。



ヒメハナムシ科 飛来個体数の季節的变化と時間帯

月日 時	IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VI 17	VI 23	VI 13	VI 20	IX 10	計
7	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3	0	0	4
8	0	0	0	0	0	6	22	22	1	1	1	0	53
9	0	0	0	0	0	2	34	3	0	1	0	1	41
10	—	0	0	0	0	5	20	3	0	2	0	2	32
11	—	0	1	—	0	1	5	0	0	0	0	0	7
計	0	0	1	0	0	14	82	28	1	7	1	3	137



(考察)

ヒメハナムシ科は飛来個体数の96%がキイロアシナガヒメハナムシで、それ以外には4種5頭の飛来があるにすぎない。キイロアシナガヒメハナムシの飛来は6月中旬から始まり秋まで続き、6月下旬にピークがある。それに対して、5月中旬に飛来する*O. affinis*と6月中・下旬にみられるベニモンアシナガヒメハナムシなど3種は短期間しか飛来しない。これらの飛来状況からヒメハナムシ科は年1回の発生と考えられる。次に飛来時刻をみると、日没直後から3時間以内に90%の個体が飛来している。

(野村)



(34) コメツキモドキ科

		IV 16	IV 23	V 14	V 21	V 28	VI 18	VI 25	VII 17	VII 23	VIII 13	VIII 20	IX 10	計
1	ルイスコメツキモドキ							1						1

(35) オオキノコムシ科

1	ヒラナガムクゲオオキノコムシ						1							1
---	----------------	--	--	--	--	--	---	--	--	--	--	--	--	---

(36) ヒメハナムシ科

1	キイロアシナガヒメハナムシ						13	79	28	1	7	1	3	132
2	ベニモンアシナガヒメハナムシ						1	1						2
3	エムモンチビヒメハナムシ							1						1
4	<i>Stilbus</i> sp.							1						1
5	トビイロヒメハナムシ			1										1

(37) ミジンムシ科

1	ベニモンツヤミジンムシ			1						2		1		4
2	<i>S. pallidus</i>							1		1				2
3	マルガタミジンムシ							2				1		3



## 文 献 の 抄 録

芝 田 太 一

LINDROTH 博士の “The Ground-Beetles of Canada and Alaska (Carabidae, excl. Cicindelinae)” (Opusc. Entom. Suppl.) は 1961 年から今までに Part 2 ~ 5 (Part 1 の Introduction は未刊) が出版された。Part 2 (1961) には Carabini, Nebriini, Scaritini, Trechini その他が、Part 3 (1963) は Bembidini — 主として Bembidion, Part 4 (1966) に Tachys と Pterostichini を、そして Part 5 (1968) では Amarini, Harpalini 及び Licinini の一部が収められている。その Part 3 と 4 の中で、日本のゴミムシ——特に学名に關する注目すべき諸点を簡単に紹介してみよう。このうち学名についての要約は以前に上野俊一博士から御教示を受けたのだが、今回大倉正文氏の入手された本文獻を拝借したので、抄録ともいえぬこの一文を草して両氏の御好意にむくいたい。

Part 3, P. 311 Bembidion amurense MOTSCHULSKY (Amur, Corea and Japan) のところで、著書は B. trajectum NETOLITZKY 1939 の四国と九州産の数個体を調べて、「trajectum は amurense のシノニムか又は亜種だ」と述べている。

P. 355 今まで Bembidion poppii の亜種として扱われてきた captivorum は、“a good species” だとある。したがって本邦産のカギモンミズギワゴミムシは、poppii の亜種でなく、次のような学名になる。

Bembidion captivorum NETOLITZKY 1943.

同じ頁にチシマミズギワゴミムシ B. dolorosum MOTSH. と、B. petrosum GEBLER の相違点が書いてある。

P. 342 Bembidion thermarum MOTSH. は B. scopulinum のシノニムとされている。それでキモンナガミズギワゴミムシの学名は下記が使用される。

Bembidion scopulinum KIRBY 1837

Part 4, P. 441 Tribe Pterostichi のところで、Pterostichi, Synuchi, Sphodri (Calathi), Agoni の区別点が指摘されている。これは 1955 年



に発表された同博士の "A revision of the genus *Synuchus* ....." の notes に詳しく説明してある。

P. 443 *Trigonognatha* 属は *Myas* 属のシノニムになっている。したがって *cuprescens* (*Trigonognatha* 属の type-species) をはじめ、おなじみの本邦産 3 種の学名は次のようになる。

*Myas aurescens* BATES 1883, キンイロマルナガゴミムシ

*Myas coreanus* TSCHITSCHERINE 1895, カクムネマルナガゴミムシ

*Myas cuprescens* MOTSCHULSKY 1857, オオマルナガゴミムシ

P. 459 *Hypherpes* (*Pterostichus* の亜属) に属する北米の一種 *adoxus* SAY が *Hoplocoelus* 亜属に移された現在、この *Hypherpes* は日本の *colonus* BATES 1883 のただ一種を除いて、その分布が Western North America に限定されていると述べ、さらに著者は上野俊一博士から送られた 2 個を検討し、亜属としての立場から *colonus* とアメリカの種類との関連性を究める必要があると追記している。

P. 506~525 *Cryobius* (*Pterostichus* の亜属) のナガゴミムシは小形で種類も多く難しい集団であるが、ここに詳述された各グループ別の解説は研究する人にとって便利だろう。

P. 567 *Sericoda* (*Agonum* の亜属) の本邦産 *karasawai* TANAKA 1960 と、北米産 *obsoletum* SAY との異なる点があげられている。つづいて日本にも分布している同亜属の *bogemani* GYLLENHAL 1813, キノカワヒラタゴミムシ、そして P. 568 に *quadripunctatum* DEGEER 1774, ヨツボシヒラタゴミムシの二種があるから是非とも一読すべきである。

以上の他にも日本と共通の種が載せられており、あまり関係のない個所でも各 tribe, genus の見事な記述は、その豊富な図とともにゴミムシの研究にとって大変参考となる。



## 若干のハネカクシ科甲虫の採集観察メモ

伊藤 建夫

### (1) *Procirrus lewisii* SHARP

7 ex. , Katano, Osaka Pref. , 24. VII. , 30. VII. & 5. IX. 1968, K. TANIZAWA leg.

採集場所は大阪平野東部の丘陵地で、カシ類を主とした雑木林の落葉下である。なおこの種は徳之島からも採集されているので新記録として報告しておく。この個体は本州産に比べて暗色で、頭部はより丸く（Post genae がより丸い）全体に点刻はより粗大で深い。

1 ex. , Kametsu, Is. Tokunoshima, 27. III. 1966, H. NOMURA leg.

### (2) *Philonthus discrepens* SHARP

1 ex. , Mt. Daihi, Kyoto Pref. , 22. VII. 1968, T. ITO leg.

立枯れの木に生えたキノコ（種は不明）より *Lordithon*, *Oxyporus* 属の種と共に採集した。

### (3) *Hesperus tiro* (SHARP)

34 ex. (18 ♂♂, 16 ♀♀), Hase, Nara Pref. , 30. IV. 1966, T. ITO leg.

この種は春季から夏季にかけて、低山地の落葉下で普通に見られるが、越冬中と思われる多数の個体を土中より採集した。

### (4) *Atanygnathus terminalis* ERICHSON

26 ex. , Mt. Kooya, Wakayama Pref. , 2. V. 1968, T. ITO leg.

採集地は高野山・不動坂の中腹で、日当たりがよく、湧水の流れる山道で、*Lesteva*, *Stenus* 属と共に採集した。この種には前胸背の赤い個体と黒褐色の個体があるが、これは♀♂の差異と無関係である。



## クリシギゾウムシの生態

木村 裕

クリの果実を加害する主要な害虫として、モモノコマダラノメイガ・ネスジキノカワガ・クリミガ・クリシギゾウムシがあげられる。そのうち前2者は茨城県園芸試験場その他で、かなり詳細に調べられているが、後2者についてはほとんどその生態が解明されていない。そのうちクリシギゾウムシについて、その被害、生活史等がほぼ判明したので報告する。

この報告にあたり、終始調査に協力下さった豊能地区農業改良普及所の今中浩三、中川利明両氏に、また調査にあたり色々御教示下さった茨城県園芸試験場の関口計主氏ならびに林業試験場九州支場の森本桂氏に厚く御礼申しあげる。

### 1. 被害

本種は9月中旬(クリの果実がかなり大きくなった頃)毬果内に産卵する。ふ化した幼虫は果実内部を食害し、老熟するまでは決して外部に出てこない。そのため被害初期の段階では被害の有無がわからないが、被害が進むとその部分が黒変してくる。約1ヶ月の食害ののち、果実に丸い脱出孔をあけ、土中に移行する。この虫による被害果率は約25%で時には30%を越えることもある。また1果実あたりの在虫数は第1表でわかるように、平均2.2頭であったが、時には8頭にも達することがあった。

第1表 1果実当り在虫数

1果実当りの虫数	1	2	3	4	5	6	7	8
果数	39	17	11	6	3	3	1	1

### 2. 産卵時期

産卵時期を調べるために定期的に被害の多い品種(伊吹・銀寄)の果実を採取し、分解して産卵の有無をみた。その結果、9月22日にはじめて産卵が認められたことにより、ほぼ9月下旬に産卵するものと考えられる。



### 3. 土中への移行時期

果実より土中への移行時期は第2表、第1図に示したとおり、年によって異なっていたが、脱出移行時期は10月第3半旬からはじまり、10月下旬～11月上旬が最盛期で、その後は若干ではあるが12月中旬まで続いた。よって産卵時期と移行時期より推察すると、本種のクリの中での加害期間は約1ヶ月と考えられる。

第2表 果実より土中への移行時期

月	10						11						12		
	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3
1966年	0	0	0	0	5	53	56	41	15	3	1	1	1	1	1
1967年	0	0	14	45	63	64	13	1	3	0	0	0	0	0	0

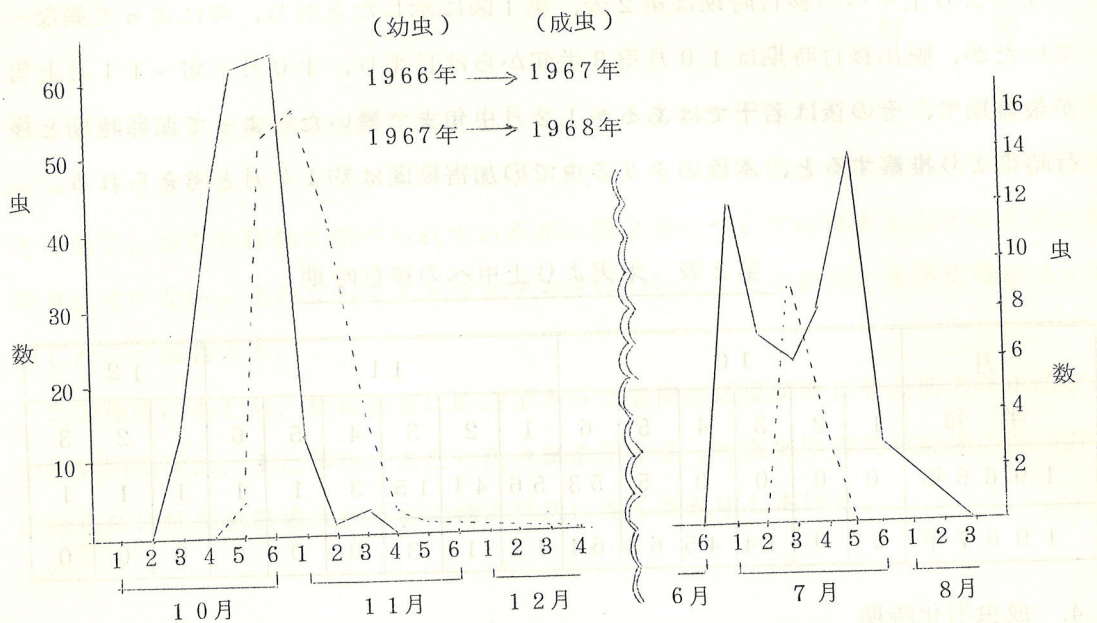
### 4. 成虫羽化時期

第3表、第1図に示したとおり、1968年度は6月にはいと蛹化が始まり、7月第1半旬よりかなりの個体数の羽化が認められ、8月第2半旬まで続いた。しかし、9月になっても羽化せずに幼虫態のまままで越夏したものがあつたが、これがもう一年幼虫態のまま過すものかどうかは不明である。このことにより、本種はほぼ年一世代発生と考えられる。

第3表 クリシキゾウムシの羽化消長

月	半旬	6	7						8		
		6	1	2	3	4	5	6	1	2	3
1967年	♀	0	0	0	3	2	0	0	0	0	0
	♂	0	0	0	6	1	0	0	0	0	0
	計	0	0	0	9	3	0	0	0	0	0
1968年	♀	0	7	4	1	1	6	0	0	1	0
	♂	0	5	3	5	7	8	3	2	0	0
	計	0	12	7	6	8	14	3	2	1	0





オ 1 図 果実より土中への移行時期と羽化時期

連 絡

◎ 住所変更のお知らせ

新 住 所

◎ 中条道崇氏 ( 2000 円 )、高橋寿郎氏 ( 1000 円 )、大野正男氏 ( 1000 円 )  
 より寄付をいただきました。厚くお礼申し上げます。

◎ 昭和 46 年度会費未納の方は至急納入下さい。



## 編 集 後 記

桜の蕾もひましにふくらむ今日、“びいとるず” Vol. II, No. 1 の編集を終え、ほっと一息ついています。今号は岩湧山の燈火に飛来する甲虫も(3)をかぞえ、前号にひきつづき微小甲虫グループでまとめるのに相当苦勞し、発刊にこぎつけました。昨年は奈良での甲虫の野外生態観察と台湾への採集旅行などの行事に追われて、年二回の発刊予定が中々実行出来ませんでした。今年是非遅れをとりもどしたいと思っています。

今後とも内容整備充実のため皆様の御援助を御願する次第です。

(野村記)

常任幹事 林 靖彦 , 木村 裕 , 野村 英世  
幹 事 川津 智是 , 酒匂 清和 , 植田 謙一  
小西 洋良 , 伊藤 建夫

びいとるず Vol. II, No. 2

昭和46年3月25日 印刷・発行

編 集 者 木村 裕

発 行 者 野村 英世

会 計 監 査 林 靖彦

発 行 所 大阪甲虫同好会

(大阪市阿倍野区松虫通1-8-10

野村 英世方)

印 刷 所 尚 文 館 工 房



